新世紀ミュージアム

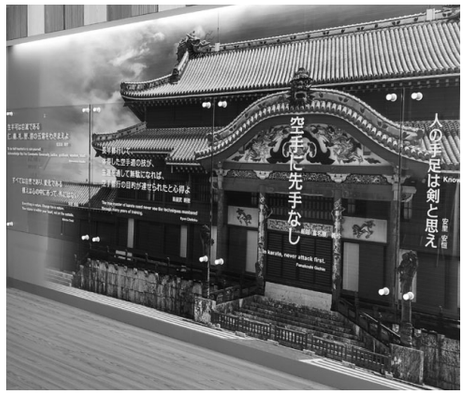
沖縄空手会館資料室／日本

相島 葉月（あいしま はつき） 民博 グローバル現象研究部

空手道は、今や日本だけではなく、世界中に愛好家をもつグローバル・スポーツへと発展した。そんな空手道のルーツや流派の多様性をわかりやすく紹介したのが沖縄空手会館資料室だ。五感を通じて空手道について学べる貴重な場所を訪ねてみた。

沖縄空手会館の外観

沖縄空手会館は昨年三月、沖縄県豊見城（とみぐすく）市にオープンした。空手道の競技場だけでなく、沖縄空手に関する図書室を併設した展示施設も開設されたことを知り、筆者は沖縄を訪れた。一連の身体動作から成り立っている空手道を、どのように展示することができるのか興味があったからである。空手は「素手」で戦うことを意味するが、沖縄空手は武具や鍛錬具を利用した稽古をおこなう流派もあり、形と組手の競技ルールも多様である。沖縄空手会館資料室では、空手特有の静と動の連続性をモノで表現しつつ、各流派が成立した歴史的経緯を通じて、沖縄空手の伝統の多様性をわかりやすく説明している。



資料室入り口のパネル。空手家の格言が並ぶ

資料室の入り口では、右側に首里城、左側に空手道の開祖のモノクロ写真が出迎えてくれる。首里城を背景として、松涛（しょうとう）館流の開祖である船越義珍（ふなこしぎちん）（一八六八―一九五七）の「空手に先手なし」に始まり、著名な空手家の格言とその英訳が並ぶ。まさに空手道の哲学的エッセンスがつまったパネルである。空手家にとっては開祖の等身大と思われる写真のパネルも非常に嬉しい展示だ。一般的に流通する写真はポートレートであるため、道着を着用して技を実践している姿を目にする機会は貴重である。

見て、聞いて、触れる空手

常設展示は三つのセクションにわかれている。壁面には琉球国時代から現在までの沖縄空手の歴史と武具や鍛錬具の使用方法が展示され、中央には鍛錬具等を体験するスペースが設けられている。

歴史セクションでは、中国や東南アジア諸国との交流があった琉球国のコスモポリタンな土壌で発祥した「手（ティー）」とよばれる武術が、二〇世紀初頭に東京で「唐手（からて）」として紹介された後、「空手道」に発展した経緯が解説されている。初学者にとっては「首里手」「那覇手」「泊手（とまりて）」といった耳慣れない用語や、各流派や開祖の名前を覚えながら歴史解説パネルを読み続けるのは容易でない。一方、展示場に併設された「沖縄空手映像シアター」で上映しているドキュメンタリーは、歴史セクションをわかりやすく要約している。

古武術と沖縄空手の武具・鍛錬具・鍛錬方法のセクションでは、名人が使用した鍛錬具に加えて、実際に稽古で使用している様子を示す写真と動画が展示されている。アクリルケース越しでも、道具が使い込まれた様子や汗の染みなどを確認することができる。また、重そうな鎚（ティー）石や鉄下駄を自由自在に操る様子は写真からも伝わってくる。

巻き藁（わら）や瓦割りといった稽古風景を描いた最古の挿絵、「南島雑話」（1850年代）

最後に「沖縄空手の体験コーナー」では、握甕（カーミ）や鉄下駄（てっかだ）といった鍛錬具を持ち上げたり、名人が繰り出す技の速さを感じたりすることができる。五キログラムの鉄下駄に足を入れてみると、歩くことすらままならず、軽々と蹴り上げる年配の師範への敬意がより一層深まる。

「沖縄空手流派企画展――上地流（うえち）・剛柔流（ごうじゅう）」は、両流派の歴史や形について詳述している。空手道の流派の成立や発展が、身体能力に優れているだけでなく、人格的に魅力のある人物の営為に立脚していることが強調されている。カリスマを展示するのは、身体動作を展示するのと同様に難しい。本企画展では、師範の等身大パネルはもちろんのこと、日常会話の音声データを視聴したり、両流派を代表する師範の手形と足形に触れたりすることで、五感を通じて空手家の人となりに迫る工夫がなされている。わたしは力強い形の演武を披露する高齢の空手家の手足が思いのほか小さかったことに驚愕（きょうがく）した。

体験コーナーの鍛錬鉄下駄。
大人用は5キログラムで子ども用は2.5キログラム

沖縄から世界の格闘技へ

二〇二〇年東京五輪から公式競技となることが示すように、空手道が琉球王朝エリートの武術から、世界中の空手家が日々汗を流し鍛錬に励む格闘技（マーシャル・アーツ）に変貌して久しい。沖縄空手会館資料室からは、グローバル・スポーツとなった空手道のルーツが沖縄にあることを、文献史料や展示資料を通じて示す、沖縄空手家や行政の営為が伝わってくる。筆者は、本展示を通じて、琉球国から始まる沖縄の歴史と空手道が驚くほどに密接に結びついていることが鮮明にイメージできた。